マキシモ・ロイ・フェルナンデス・ロドリゲス

活動:

武道家

武心道場代表

キューバ武道協会副会長

マキシモ・ロイ・フェルナンデス・ロドリゲス先生へのインタビュー

マキシモ・ロイ・フェルナンデス・ロドリゲス先生は、キューバにおいて「大東流合気武術」の中心的な存在であり、「武心（ぶしん）道場」で教えています。国内外のいくつかの武道団体のメンバーであるとともに、キューバ武道協会（ACAM）の副会長の一人で日本武道を担当しています。キューバ人と日本人、双方の先生方の忠実な弟子であり、彼らの言葉に忠誠を誓い、武道を通じて、調和のとれた穏やかで教育的な生き方を、日本武道に興味を持つ人々に教えることを人生の目標としています。

人生としての武道

ロイ先生は、ハバナ県のサン・ミゲル・デル・パドロン市で、2人兄弟の弟として生まれました。今でこそ50年近く武道の修行を続け、20年以上指導者として活躍し、数々の実績を残していることでキューバでは知られているロイ先生ですが、驚くべきことに、幼少時代は内気で病弱で、スポーツや運動も得意ではなかったそうです。しかし、友人に誘われ、親に内緒で柔道を始めるつもりで道場を訪れました。たくさんつまずくこともありましたが、1973年8月、ロナルド・ベイティィア・バルディビエ先生[1]の指導する柔道の道場に受け入れられ、初めて武道を始めることになりました。当時を振り返り、「柔道は（今や）スポーツに発展しましたが、武道としての起源や歴史を調べるうちに、日本古来の文化にますます興味を持つようになりました」と語ります。ロイ先生の武道の素質と日本への関心は、次第に様々な流派の空手道など、その他の武道にも発展していきました。

柔道を始めた当時 (1975)

[1]柔道選手としての実績を積み重ねた後、1986年から2015年までキューバ女子柔道のナショナルチームの監督を務め、国際大会及びオリンピックでキューバに数多くのメダルをもたらした。2018年に国際柔道連盟殿堂入り。2022年に逝去し国葬が挙げられた。

ロイ先生は、空手家としてキューバナショナルチームのメンバーに選ばれ、国内外の大会で幾度もチャンピオンになりました。しかし、競技武道で成功する一方で、彼の人生観を大きく変える人物との出会いがあったのです。

キューバ対ベネズエラ空手道最終戦 (1988)

その方はギジェルモ・ムルフィ・デル・クエト先生で、今はカナダで大東流の道場で稽古をつけています。ムルフィ先生は、江戸時代の会津藩で栄え、今日では「大東流合気武術」の名で知られる御式内（おしきうち）という武道の教えを受けた数少ない

キューバ人の一人です。当時まだ若かったムルフィ先生は、キューバに一時的に住んでいた日本人から、その技を教わりました。そして、若い頃のロイ先生を弟子に取り、キューバに「大東流合気武術」を継承しようとしました。

ロイ先生が「大東流の師匠」と仰ぐムルフィ先生と過ごした時間は、ロイ先生に新たな視点を与え、武道家としての志は「はかない競技の成果」を超えるものでなければならないと気づかせました。より重要な目的のための武道の伝統やその方法を振り返り、「スポーツの世界から離れ、武道の中で真の道を見つけることに集中しようと決めました」とロイ先生は説明します。それ以来、ロイ先生は、大東流の古文書に書かれている義務感、感謝の気持ち、心身一如などの倫理観、謙虚さ、誠意といった概念を、より深く理解し、それを私生活で生かすことに真摯に取り組むことにしました。「自分の最大の敵である自分自身を倒すことに全力を注ぐことにしたのです」とその内情を打ち明けます。

ギジェルモ・ムルフィ・デル・クエト先生 (2010)

長年にわたり武道家として研鑽を積み、様々な分野の武道や流派に通じてきたロイ先生の日々の修行に、多くの良き指導者が関わってきたことは想像に難くないでしょう。「私がもし何かポジティブなことを、人々や社会に提供できるとしたら、それはただ一つ、美しく、有用で、興味深い教えを持ち、かつ人間が人生の中で大事なものを大切にすることを学ぶ道標となる文化と芸術を伝える努力をすることだと思います。そして、その功績は私ではなく、愛と忍耐と寛大さを持って私に知識を与えてくださった私の師匠たちのものなのです」と慎んで言葉を並べました。

武心道場

ロイ先生は、ご自身の武道との出会いの経験から、武道が人、特に若い人たちの育成に貢献できることを理解したうえで、十分な知識と能力を培い、師匠らからも許可が得られたことから、日本の武道の良い習慣を学び、価値観を形成する場を提供するという立派な目的を持つ道場を作ろうと思い立ちました。そもそも場所を確保し、適当なスペースに改造するのも、物資や資金不足がたたり決して簡単ではありませんでしたが、夢を実現する一心で何とか道場を創るに至りました。そして1992年に、ムルフィ先生が教えているカナダのフジヤマ道場にちなみ「フジヤマ道場分校」として御式内を教え始めたのです。これまでいくつかの名前が付けられましたが、今では、首都ハバナの都心部から幾分離れたサン・ミゲル・デル・パドロン地区に「武心道場」という名前で存在しています。

武心道場における稽古 (2020)

武心道場の入り口にある鳥居とその他の日本の伝統装飾 (2018)

そこで幼い頃から武道を習い始めた人の多くは、既に大学を卒業していますが、今でも武道の修行に励んでいるといいます。この道場では、単に流派の技術を習得するだけでなく、良い学業成績を収め、家族、先生、友人に敬意を払うことも重視されます。この道場のおかげで、多くの若者が公私ともに、より良い人生を送れるようになっていると、地元の人たちは語っています。また、日本で発展してきた武道の教義をより深く理解するためには、日本文化を理解しようとすることが必要との考えの下、盆栽、生け花、折り紙、俳句、茶道などを取り入れ、弟子たちが総合的に学べる場となっています。

稽古は月曜日から金曜日の夜の時間帯、そして土曜日の午前中に行われています。新型コロナウイルス感染症流行によって多くのメンバーが去っていったため、現在は20人

ほどの少ない人数で活動していますが、生徒数の増加と道場としての機能回復のための努力が続けられています。

「普段の生活において真摯に武道を実践することは、肉体的な向上だけでなく、精神的な発見と自分の肉体的な限界を超えるものを受け入れるという、更なる高みの発見に繋がるのです…」

キューバでの武道

「先祖代々の知識とスピリチュアリティー」国際会議、マヌエル・ファハルド体育大学 (2023)

「普段の生活において真摯に武道を実践することは、肉体的な向上だけでなく、精神的な発見と自分の肉体的な限界を超えるものを受け入れるという、更なる高みの発見に繋がるのです。これなくして、いかなる武術も本物、誠実、実りあるものであるとは言えません。」とロイ先生は、武道が自身の成長に与えた役割を振り返ります。「その結果、社会の目的をよりよく果たすために必要な倫理観が形成され、行儀をわけまえた、義務感の強い、感謝の気持ちを忘れない人々が集まる社会が実現するのです。」

日本武道を学ぶためには、武道の真髄を理解する必要がありますが、キューバのような異なる文化環境から、日本の文化を理解することは困難だとロイ先生は考えています。キューバには、何年も前に武道がもたらされましたが、十分に理解されず、歪曲や誤解、時には都合よく改められるなど、その本旨に反することも起きていると言います。「私たちの国では、ACAMを既に構成する各武道の再統合を通じて、これらの武道が有する文化の回復を実施しています。」と結びました。

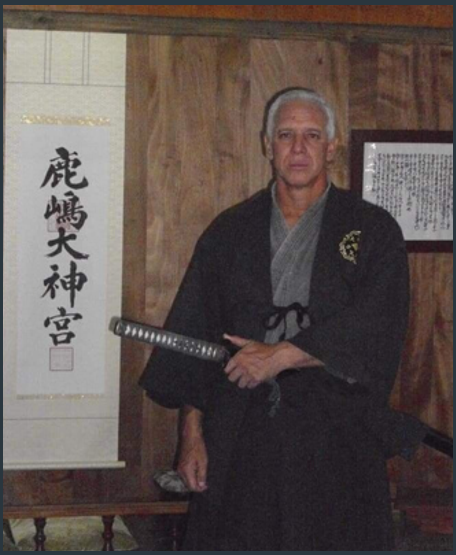
将来的には、日本の武道について、経験を積んだキューバ人の先生方と、自発的にこのキューバで武道を教えてくださるという日本人師範からアドバイスを頂ければ、と述べつつ、「このような友好的な貢献が、武道の将来を新しくそしてより良いものにしていくでしょう」と語りました。

関口高明師範と小島恵子先生の訪問、武心道場 (2009)

マキシモ・ロイ：隠された真実

数年前、伝記作家でもあるラファエル・アンヘル・マルティネス・サラサル氏は、ロイ先生の半生を本に纏めるべきだと考えました。主人公となるロイ先生にとってこの野心的なプロジェクトの提案は驚きでした。まだ編集はされていませんが、既に書き終えられた本「マキシモ・ロイ：隠された真実」のプロローグで、ロイ先生の師匠である山本綾子先生は「（この本は）様々な影響を受けて変遷する島国において、武道という文脈の中で生き残るための教訓をある決定的な要素とともに記しています。それは、自分が正しいと確信しているとことを確立し成功させようとする一人の男の意思です」と綴りました。

ロイ先生は、弟子たちの言葉を借りれば、教養があり、愛想がよく、素朴で、また、単なるスポーツのプライドを超えて、より深い価値を追求することができ、自らを手本として弟子たちに素晴らしい教訓を与えることができる人物です。キューバの武道界で多くの人に知られ、尊敬される世代を超えた師匠、この本がまとまるとき、そのレガシーが世に広がるかもしれません。



「日常是道場」という哲学を追うロイ先生 (2021)